雑学書庫 知識の記録

簡単なことにばかり話が長くなる、些末の法則（Law of Triviality）

記事のURL
https://www.gklibrarykor.com/ja/article/14215/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

会議で数億ウォンの契約は拍手とともに数分で通ったのに、オフィスの給湯室にどのコーヒーを置くかを決めるのには1時間をはるかに超えた、という経験はありませんか。本当に重要な決定は急いで済ませ、些細なことで声が大きくなる光景は、どの組織でも珍しくありません。 この現象には名前があります。イギリスの歴史学者シリル・ノースコート・パーキンソン（Cyril Northcote Parkinson）が1957年に出した本で紹介した、些末の法則（Law of Triviality）です。一つの議題に使う時間は、その議題にかかる金額に反比例する、というのが核心的な主張です。 本資料では、この法則が生まれた風刺的な会議の場面から、人が小さなことで饒舌になる理由、ソフトウェアの世界で得た愛称、そして会議でこの罠を避けるコツまで、順にまとめます。 大きな議題は素通りし、小さな議題に居座る会議 原子炉と自転車置き場の話 パーキンソンは『パーキンソンの法則（Parkinson’s Law and Other Studies in Administration）』の一章で、架空の財務委員会を描いています。議題は三つです。一つ目は原子炉の建設にかかる1,000万ドルの契約、二つ目は事務職員のための自転車置き場を2,350ドルで建てること、三つ目は委員会のコーヒーなどの茶菓代です。 原子炉の議題は大きすぎて専門的な